

はしがき

本報告書は、2008年度成城大学文芸学部の量的社会調査実習の中で実施した調査分析結果をまとめたものである。量的社会調査実習は、社会調査士資格認定科目のG科目として位置づけられており、週1コマの一年間にわたる実習である。

2008年度の実習経過ならびに分析に用いた調査データの詳細は以下の通りである。

実習計画と今年度の取り組み

量的社会調査実習では、調査の立案、実施、分析、結果報告などの一連の過程を経験して量的調査の技法習得を目指している。調査テーマに関する文献の整理、調査票の作成・配布・回収、データ入力と集計作業、報告書の執筆など、全ての過程で多くの労力を要することから数名のグループでひとつのテーマを選び調査する形態をとっている。その中で、今年度は履修生が1名であり、例年通りの実習計画に基づいて調査票調査を全て1人で行なうには作業量が膨大になることを考慮して、調査テーマの文献整理、データ分析、報告書の作成に重点を置いて実習を進めた。学生が関心のある調査テーマが化粧品意識であったことから、公開されているデータの中から化粧品に関する項目を用いた調査データを提供してもらい(提供データの出典と詳細は下記参照)、そのデータを再分析して調査報告書を作成する運びとなった。2008年8月にデータの提供を受け、同年9月から、それまでに整理した化粧品意識に関する知見をもとに、教員、TA、学生が各々関心のある視点から調査データの分析を実施した。本報告書では、大学生の化粧品行動と美しさ意識との関連、化粧品にかかる投資額と化粧品に感じる満足度が化粧品を重要視する理由に及ぼす影響、美しさへの満足感と女性の加齢意識に関する二次分析の結果を報告する。

個票データの出典と調査概要

量的社会調査実習では、データの二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJ データアーカイブから「現代女性の美しさへの意識調査(ポーラ文化研究所)」の個票データの提供を受けた。

「現代女性の美しさへの意識調査」は、ポーラ文化研究所が2006年11月に実施したインターネット調査である。調査対象者は東京23区および政令指定都市に居住する20～59歳の女性2500人である。「平成17年国勢調査」から対象者居住地域の人口構成比に基づいて年齢5歳単位で割り付けた各層と人数は、20～24歳：283人、25～29歳：324人、30～34歳：380人、35～39歳：338人、40～44歳：295人、45～49歳：257人、50～54歳：280人、55～59歳：343人である。調査項目は、「きれいな女性」のイメージ、日常生活で目指している「きれいな女性」のイメージ、「きれいな女性」でいることが重要な理由、その満足度、エイジング志向、加齢受容意識、女性の美容行動など、美しさへの意識構造を探る構成となっている。ポーラ文化研究所による分析結果は、「現代女性の美しさへの意識」調査 ～、「2006年調査レポートダイジェスト」などにまとめられている。

2009年2月 鈴木 靖子

目 次

はしがき

大学生における化粧行動と美しさ意識との関連

内藤美沙紀

1 問題	1
2 方法	5
3 結果	6
4 考察	9
引用文献	11

化粧にかける投資額と化粧に感じる満足度が 化粧を重要視する理由に及ぼす影響

榎木 一矢

1 目的	13
2 方法	14
3 結果	15
4 考察	20
引用文献	21

美しさへの満足感と女性の加齢意識を考える

～ 足るを知るものはよりよく生きるなり～

鈴木 靖子

1 問題	22
2 方法	23
3 結果	27
4 考察	31
引用文献	34

執筆者一覧

35